



おかしエッサくんで行く 昔さんぽ

がっさん や
月山からの矢



広瀬のシンボルの一つである月山には、富田城というお城があり、昔から深い歴史を持ち、数多くの伝説が残っています。この月山に初めてお城を築いた人は、今から約860年前の藤原景清というお侍です。景清は平家の侍大将で、源平合戦で活躍し、その名を挙げました。

その景清が出雲国（島根県東部）にやって来て、月山に城を築くことを決めました。ところが月山の頂上には神社がありました。景清は「戦になって神社に何かあってはいけない」と考え、城を築く前に神社をうつすことにしました。

ある日の夜、真っ暗な月山の頂上に景清の姿がありました。手には一本の白羽の矢を持っています。そして、風が治まったのを見ると、矢を弓にかけ、手に力を込めました。そして、目いっぱい弦を引き、空に向かって矢を放ちました。矢は「ヒョウ」と音を立てて、はるか彼方の暗闇へ吸い込まれて行きました。



明るくなってから飛んでいった方へ矢を探しにいくと、大きな松に矢がささっていました。景清はこの場所が天が示した場所だとして、神社をうつすことに決めたのです。この場所が現在の富田八幡宮で、ささった松は矢中の松と呼ばれています。

▲富田八幡宮にある矢中の松。



矢中の松（広瀬町広瀬）やすぎ再発見

富田八幡宮の境内には、景清の矢がささったとされる矢中の松が立っています。松は四代目で、当時のものではありませんが、この場所からは約1キロ先の月山の頂上が見え、伝説を今も感じることができます。

また、景清が放った矢が富田八幡宮に社宝として大切に保管されています。矢は矢尻がすべて松に突き刺さっており、勇猛で鳴らした景清の剛力を物語っています。



▲富田八幡宮の社宝。

